

## 2 「基礎的な学習の時間」について

### (1) 設定の趣旨

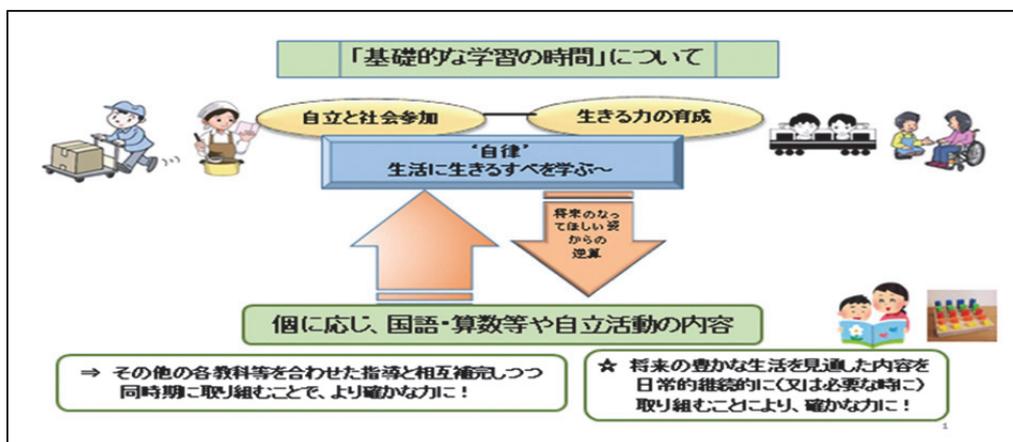
ア 各教科等を合わせた指導としての設定趣旨

本校では、より良く「生きる力」を具体的な学習活動から身に付けるように、学級編制を学年制とするとともに、各教科等を合わせた指導を教育課程の中心に据えて学習を進めてきました。加えて、個々のねらいを重視し、生活を豊かにするための基礎的・基本的な各教科の内容やコミュニケーション力を身に付ける「基礎的な学習の時間」を設定し、相互に関連付けることから、児童生徒の生きる力・生活に生かせる力がより具体的にはぐくまれるのではないかと考え、実践研究を進めてきました。

昨年度は、「基礎的な学習の時間」を各教科等を合わせた指導の一形態である「日常生活の指導」として教育課程上に位置付け、知的障害を主たる障害とする学級において試行的に実践を行ってきましたが、今年度からは、「基礎的な学習の時間」の名称で、各教科等を合わせた指導として教育課程上に位置付け、基本的に全ての学級で実践することとしました。

「基礎的な学習の時間」は、「将来の自立した生活を想定した上で、その実現に向け、一人一人のその時期に身に付けておきたい基礎的・基本的な各教科等の内容を具体的な課題を解決する経験をとおして学習するもの」と本校では定義しています（資料編 P64 「基礎的な学習の時間」について 参照）。

「基礎的な学習の時間」を各教科等を合わせた指導として設定することにより、個に応じた課題がより必要な時期に設定でき、また、個に応じた学習速度で学べることから一人一人の目標が達成されやすいと考えます。また、課題に応じた適切な集団を学年内で組織することから、集団の良さも発揮した学習ともなります。このように個に応じ、また同時に集団で学ぶことをとおして豊かな将来の生活につながる基礎的・基本的な学力（読み・書き・計算）を充実させ、健康づくり、基礎的・基本的な体力づくりに関する力をはぐくみ、自立活動に関連する社会性の獲得、コミュニケーション能力の向上につなげる学習が、私達がめざす「基礎的な学習の時間」です。



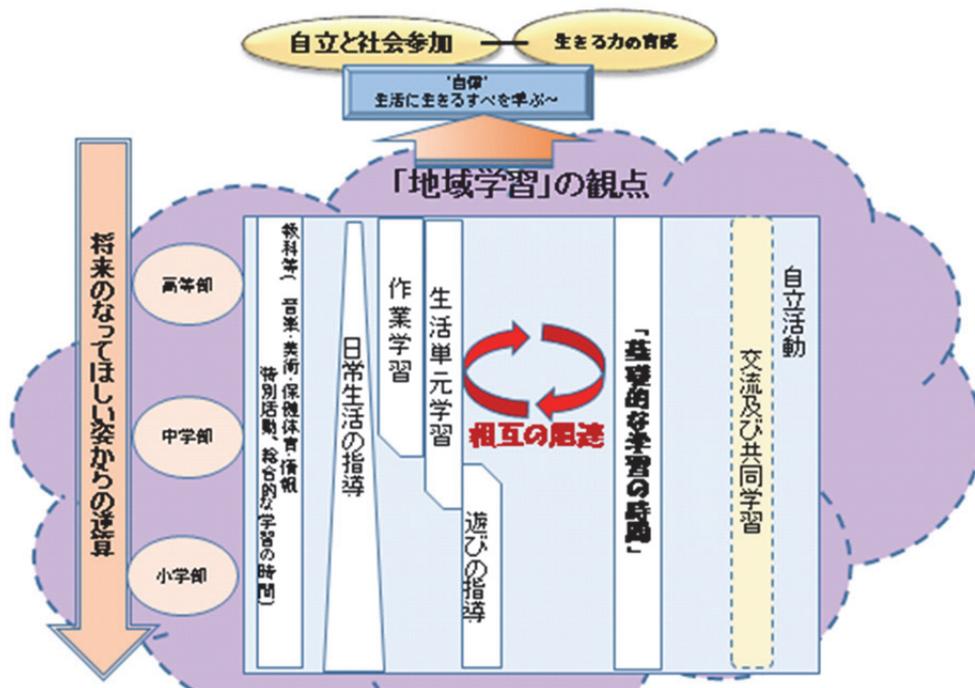
イ 他の各教科等を合わせた指導との連動

他の各教科等を合わせた指導である「日常生活の指導」、「遊びの指導」、「生活単元学習」、「作業学習」と「基礎的な学習の時間」との関係は、野球で言えば「ゲーム形式の練習」と「バッティングや守備練習」に例えられるかもしれません。「基礎的な学習の時間」では、その時々「生活単元学習」、「作業学習」等と関連付けた各教科や自立活動の内容、また、その子どもの将来の生活の質の向上につながる各教科等の内容を学習しています。



「基礎的な学習の時間」と相互に関連させることを大切にする事から、他の各教科等を合わせた指導の内容をより深く理解し、活動が具体的にできるようになることをとおして、一人一人の将来の生活の質が高まると考えています。

各教科等を合わせた指導との連動



ウ 「基礎的な学習の時間」の週程上の位置付け

「基礎的な学習の時間」は、特に小学部の低学年においては、また、内容によっては毎日繰り返し取り組みたい学習活動です。したがって、週程上は小・中学部では毎日帯状に朝の時間帯や午後の時間帯に設定しています。高等部ではクラスの実態に応じて週程上に位置付けています（P6「各学部の教育課程」参照）。

## (2) 今年度の取組について

### ア 「基礎的な学習の時間」プログラムシートの作成と活用

「基礎的な学習の時間」を各教科等を合わせた指導として実践するにあたり、知的障害教育の各教科の指導内容を参考に、短期目標や取組項目を記入するプログラムシートを個に応じて作成して指導を進めています。個別の指導計画に基づいて具体的な取組項目を記入し、指導者間で共有することから、計画的に指導できるようにしました。また、他の各教科等を合わせた指導との関連を記入する欄を設け、「基礎的な学習の時間」の学習内容を他の学習と関連付け、生かしていくという意識を指導者が常にもって指導できるようにしました。

「基礎的な学習の時間」プログラムシート及び記入例

短期目標	取組項目				
個別の指導計画の短期目標を記載します。	ひらがなの文字の区別(文字カード合わせ)	国語	「おちゃ」「さら」「おかし」の文字と絵合わせ	国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別の指導計画を補うものとして、取組項目・該当する教科等を記入していきます。</li> </ul>
	自分の名前表記(なぞり)	国語	自分の名前表記(穴ぬき)	国語	
	カレンダー、登校日と休日の区別(2色のシール貼り)	算数			
・3までの量が分かる	数字と同量のビーズを入れる	算数	数字を見て、お菓子の模型を皿に置く	算数	
	口の体操	自活	吹く楽器(笛・ラッパなど)	自活	ピンポン玉のストロー吹きゲーム
	人との適切な距離の取り方(ロールプレイ)	自活			

相互補完となる他の各教科等を合わせた指導  
(単元名及び特徴的な活動)

- ・「お茶会をしよう」: 文字カードを見てお菓子を配る。
- ・「UJIクリーニング」: 布巾の枚数を数える。
- ・「模擬喫茶を開こう」: 招待状に、自分の名前を書く。

## イ 目標・内容の整理

教育実践向上プロジェクトでは、「現在どのような実践がどのような目標により行われているか」を整理するために、目標と内容の一覧表を学部ごと、コースごとに作成し、整理しました。整理上、目標を6つの区分(【知覚】【対人・コミュニケーション】【操作・身体】【認知・認識】【学力】【学習態度】)に分けてみると、どの時期に、どのような目標・内容が多い傾向にあるのか、他にはどんな目標・内容が必要であるかなど、自分達の実践を客観的に振り返ることができました。



各学部の特徴としては、以下の点が見えてきました。

【小学部】学習態度や日常生活に関連した学習

【中学部】教科的(国語・数学)な内容、手指の操作に関する学習

【高等部】より豊かな社会生活を営み、就労していくための直接的な課題

また、肢体不自由を主たる障害とする学級では、見る・聞くといった知覚に関する内容や、身体面の学習内容が多く見られました。

これは、実践している学習の目標・内容を分類したものであり、指導すべき全ての項目が網羅されているものではありません。今後実践をとおして、①どのような項目が必要であるのか、②どのような分類項目で整理していけば、子どもの実態に即しつつ指導に活用していけるのか、引き続き実践的に検討していきます。

## ウ 肢体不自由(重度重複)の児童生徒における「基礎的な学習の時間」について

肢体不自由を主たる障害とする児童生徒の学級では、今年度から「基礎的な学習の時間」を設置し学習を行いました。その中では、特に、障害が重度で重複している子ども達にとっての「基礎的な学習の時間」の在り方についてどのように考えていけばよいのかという課題が明らかになってきました。自立活動の「時間における指導」との違い、他の各教科等を合わせた指導との関係性をどのように作り出せばよいのか、また、どのような内容がこうした児童生徒にとっての必要な「基礎的・基本的」な学習内容なのか、といった課題点に今年度は、実践的に取り組んできました。

また、その過程において、筑波大学教授・筑波大学附属久里浜特別支援学校長である下山直人先生を講師にお招きし、授業を参観及び助言をいただいたくなど、肢体不自由教育について研修する場を持つこともできました。



下山先生の助言から、今年度時点での肢体不自由のある児童生徒における「基礎的な学習の時間」を以下のように整理しています。

- 「時間における指導」は自立活動6区分のうち「健康の保持」、「身体の動き」の2区分に関することを中心に取り組む。

一日の生活の始まりである自立活動の「時間における指導」では生命を維持し、日常生活を行うために必要な健康状態の維持・改善を図ることを目的とした「健康の保持」、また、日常生活や作業に必要な基本動作を習得し、生活の中で適切な身体の動きができるようにすることを目的とした「身体の動き」が軸となります。「身体の動き」については、特に（１）姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること、（２）姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること、（４）身体の移動能力に関することをねらいの柱として学習することとします。

- 「基礎的な学習の時間」については6区分すべてを含みつつ、特に「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の動き」（主に（３）日常生活に必要な基本動作に関すること（５）作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること）、「コミュニケーション」などを中心に取り組む。
- しかし、学習場面を明確に区分することよりも、その子どもにとって必要な学習内容が、全ての教育活動の中に漏れ落ちなく配置されていることが大切である。
- また、「基礎的な学習の時間」における学習内容が、その学習時間の中で完結するのではなく、他の各教科等を合わせた指導につながり、生かされていることが最も大切なことであると考えられる。

肢体不自由を主たる障害とする学級における「基礎的な学習の時間」の学習内容例として以下のようなものが挙げられます。

- ・視覚に対して中心に働きかける学習  
(ex. まぶしさ、視力、視野、視線、色、形など)
- ・触覚に対して中心に働きかける学習  
(ex. 暑さ、熱さ、痛み、風圧、手触りなど)
- ・自分の動きと結果の因果関係理解を高める学習  
(ex. 触れば鳴る、穴に球を落とすと入る、押せば缶が倒れるなど)
- ・外界へ向かうために目的的な行動が広がる学習（始点と終点を意識する）  
(ex. 目の前のボールに気付く→触れる→落ちる→落ちると音が鳴る→終わり、など)
- ・コミュニケーションに関する学習（子どもの発信の力）
- ・支援機器を活用した学習（iPadの活用、スイッチの活用）
- ・国語・算数など教科の視点を持った学習（読み聞かせ・マッチングなど）

### （３）実践の紹介

次に、実践事例を紹介します。